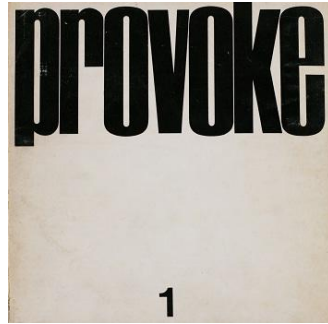


# 日本写真の1968

1968—Japanese Photography

会場 東京都写真美術館 2階展示室  
開催期間 2013年5月11日(土)～7月15日(月・祝)  
主催 東京都 東京都写真美術館



左上) 武林盛一 「幌内駅」 1871-80年頃

右上) 『プロヴォーク 思想のための挑発的資料』 第1号表紙 1968年11月1日 プロヴォーク社

左下) 森山大道 「無題」 『プロヴォーク』第二号より 1969年

右下) 牛腸茂雄 シリーズ「日々」より 1967-70年



## 企画概要

1960年代後半は、戦争、革命、暗殺など、世界中のあらゆる領域でこれまでの枠組みに対して根源的な問いかけと異議申し立てが行われました。写真においても、近代的写真が構築した「写真」の独自性とそれを正当化する「写真史」への問いかけが始まりました。

特に1968年は、「写真100年—日本人による写真表現の歴史展」、『カメラ毎日』での「コンポラ写真」の特集、『プロヴォーク—思想のための挑発的資料』の創刊、そして沸騰する学生運動は大学から路上へ、さらに農村へと展開し、闘争の側から撮影した写真群が巷に叛乱してゆくなど、今日の「写真」の社会的な枠組みを考える上で重要な出来事が集中して現れました。本展では、「1968年」を中心にして、1966～74年の間で、日本で「写真」という枠組みがどのように変容し、世界を変容させていったかをたどり、「写真とは」「日本とは」「近代とは」をさぐります。

## 展示作品および資料 (作品 250 点、資料 43 点) ※詳細は別紙出品リストを参照

### ■出品作家

東松照明、森山大道、中平卓馬、高梨豊、田本研造、武林盛一、桑原甲子雄、牛腸茂雄、鈴木清、新倉孝雄、田中長徳、田村彰英、渡辺眸、ユニット 69 ほか

### ■出品資料

『PROVOKE』、『カメラ毎日』、『フォトクリティカ』などの写真雑誌  
『朝日ジャーナル』『アサヒカメラ』『デザイン』などの一般雑誌  
「写真100年—日本人による写真表現の歴史展」関係資料 ほか

# 4つのキーワード

本展は1968年、日本写真に起こった4つの出来事を核にして、1966～74年の作品を紹介します。

## プロローグ

本展覧会で、1966～67年の写真動向を68年へのプロローグと位置づけました。それは、報道写真とかコマーシャルといったこれまでの写真の分類を超えて、「写真とは何か」という問いかけが始められたからです。それは近代写真が構築してきた「写真」の枠組みを問いかけるものと言ってよいでしょう。

## 1. 「写真100年—日本人による写真表現の歴史展」

1968年6月1日、日本写真家協会の主催で開催された「写真100年—日本人による写真表現の歴史展」は、東松照明を中心に多木浩二、中平卓馬、内藤正敏、松本徳彦らが編集委員として資料の収集と調査を行い、出品点数は1640点に及びました。北海道開拓写真の再評価、桑原甲子雄や植田正治の再発見、アノニマス（無名性）の写真への注目など、今日に繋がる日本写真史の歴史観を構築しました。これをもとに『日本写真史—1840～1945』（平凡社、1971年）が刊行され、同時代の写真表現に大きな影響を与えました。

## 2. 『プロヴォーク 思想のための挑発的資料』

1968年11月、中平卓馬、多木浩二、高梨豊、岡田隆彦（詩人）を同人として刊行された写真雑誌『プロヴォーク 思想のための挑発的資料』（2号より森山大道が参加）。アレ・ブレ・ボケの表現が注目されましたが、それは近代的写真表現が構築した「写真」の枠組みを根源的に問いかけるものでした。69年に2、3号を刊行し、70年に『まずたしからしさの世界をすてる』（田畑書店）を刊行して、活動を停止しました。

## 3. 「コンポラ写真」

『カメラ毎日』1968年6月号で、「シンポジウム：現代の写真—日常の情景」と題された特集の中で、大辻清司は「コンテンポラリー・フォトグラファーズ — 社会的風景に向かって」（1966年12月 ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真博物館）展に参加したアメリカの写真家たちと共通する現実への態度を持つ日本の若い写真家たちの動向を「コンポラ写真」と紹介しました。日常への私的なまなざしを特徴とする写真表現は、若い世代の写真家たちに「写真」の新しい可能性をもたらしました。

## 4. 「写真の<sup>はんらん</sup>叛乱」

70年の安保改定を前にして学生たちは、状況を変革しようと、大学構内から路上へ、そして農村へと、あらゆる場所に叛乱していきました。この熱い時代を多くの写真家たちが撮影していますが、本展では、報道写真家ではなく、学生や農民たちの側にたって撮影した写真群にスポットをあてます。あわせて全国の大学写真部の連合組織である全日本学生写真連盟の学生・OBたちによる「集団撮影行動」と称された撮影プロジェクトの写真群を紹介します。集団的無名性によって撮影・発表された表現は、新たな問題を投げかけます。

## エピローグ

1968年に提起されたさまざまな問題は、70年代の写真状況を動かす原動力となってゆきます。東松照明は66年の「われらをめぐる海」から「写真100年」展、「プロヴォーク」の創刊、74年の森山大道や荒木経惟、細江英公らと「WORKSHOP 写真学校」の設立など、この時期の重要な動向に深くかかわっています。そして「被写体のために沖縄に行く」と宣言したシリーズ「太陽の鉛筆」は、その分水嶺に位置しているのではないのでしょうか。



ユニット'69 石川島播磨重工  
「'69 幻実日本」より 1969年

## 参考資料

この展覧会を企画した金子隆一専門調査員（東京都写真美術館）に、1968年とその時代の写真について、話をきいてみた。（東京都写真美術館ニュース「eyes」77号より）

写真はそれだけで成立するものではなく、人々の生き様や思想、様々なカルチャーと密接にかかわり合いながら、ともに立ち上がってくるものなのではないか？そして、その流れは、もしかしたら、ロック、ジャズ、フォーク、ニューミュージックと、各時代を彩った音楽の変遷と似ていると言っても良いかもしれない。

1968年。まさに、世界中が革命や社会運動など激動の中にあつたこの時代、他のカルチャーと呼応するように、写真表現は大きな節目を迎え、日本独自の表現が新たに芽吹いた時期でもあつた。

—ここ数年、美術館や出版界で日本の1960年代、70年代がさかんに取り上げられています。特に写真作品に対する海外からの注目度が増しているとききました。

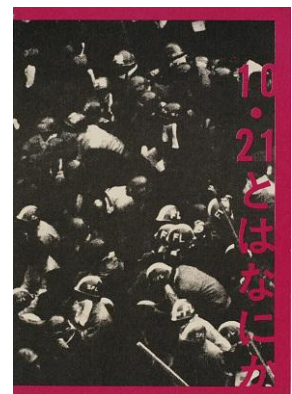
「この時代、日本では全共闘（全学共闘会議）を主体とする学生運動が過激さを増して、機動隊が動員されるといった事態に発展したり、強権的な空港建設に異議を唱えた三里塚闘争が社会問題化していました。若い写真家や学生たちは、学生運動であれば学生の側、三里塚であれば闘争する農民の側に立って撮るということが基本的な姿勢であり、だからこそ彼らは当事者に受け入れられて、現場で自由に撮ることができました。ところが、フランスでは1968年にパリ五月革命と呼ばれる反体制運動の嵐がまきおこり、アメリカではベトナム反戦の大規模な運動が繰り広げられていたのに、それらを記録したものは雑誌社や新聞社のカメラマンが撮った報道写真しか残っていないのだそうです」



三里塚写真の会 『三里塚』より 1971年

—つまり、当事者の側に立ち、つぶさに記録するという写真のあり方が、図らずも日本独特のものとしてとらえられているということですか？

「そのような写真はアメリカにもフランスにもないそうです。パリ五月革命にしても、学生たちが日々どんなふうにも暮らしていて、どんなことが起きていたのか、そういう全体を撮ろうとしたものはないと聞いています。もちろん、この当時撮影していた人たちは、目の前にある現実をなんとかしたいという一心でやっていたわけで、日本独特の写真を撮ろうなどと思っていた訳ではないんですが、結果的に、今そのようにとらえられているわけです」



10.21 とはなにかを出版する会  
『10.21 とはなにか』表紙 1969年

—激動の時代の中でも、特に1968年に焦点を当てた展覧会を企画された目的な何なのでしょう？

「本展で取り組みたいのは、実は写真の表現の問題ではないんです。それよりも、写真というものが、どういう状況の中で成り立っているのか、その枠組みを解き明かすことができれば良いなと思っています。そして、象徴的な出来事がいくつも起きた1968年という年は、そういった視点で日本の写真を見る、とても良い切り口になるのではないかと考えたわけです」

—1968年というと、伝説的な写真雑誌として度々取り上げられる「プロヴォーク 思想のための挑発的資料」が創刊されていますね。

「写真というのは、ちゃんとピントがあっていて、ものの細部まできちんと写っていないとダメだし、それが写真の写真たるゆえんであるというのが、それまでの一般的な認識であり、近代写真の枠組みでもありました。ところが、プロヴォークの写真家たちが発信したのは、俗にいうアレ・ブレ・ボケ写真、簡単に言えば何が写っているのか分からない写真だった。つまり、近代写真が作り上げてきた枠組みを、徹底的に破壊することが彼らの最大の目的であったのではないかと思います」

—それがとても格好良く見えるのは、同人であった多木浩二や中平卓馬の挑発的な文章の力もありましたよね。

「まさにアジテーション（扇動）ですね。実際、中平卓馬は当時の学生運動の主要なアジテーターでもありました。結局、革命はおきなかったわけですが、学生運動に没頭した学生だけでなく、音楽や映画や演劇の世界でも、みんなそれぞれが自分たちのヴィジョンを持つとした時代だったし、写真家もそういった大きな時代の流れの中で写真を撮っていたと言って良いと思います」

—一方、コンポラ写真という言葉が世に出て注目されました。

「この用語の基になっているのは、1966年にアメリカで開催された「コンテンポラリー・フォトグラファーズ 社会的風景に向かって」という展覧会です。展覧会カタログが輸入されて、私的な視点で世界を撮るといふ写真のあり方が提示されて、リー・フリードランダーなどの表現が話題になりました。そして、1968年に雑誌『カメラ毎日』で、このような写真が取り上げられたわけですが、この時、コンポラ写真という言葉もメディアで最初に使われたようです」

—日本のコンポラ写真の特徴はどんなものですか？

「問題になるのは、日常性、私性というものではないかと思っています。プロヴォークの写真を、何が写っているのか分からない写真であったとするならば、コンポラ写真は、何が写っているのかは分かるけれども、何を撮ったのか分からない写真と言えるかもしれません」

—つまり、あまりに日常的なものが写っているがゆえに、写真の意図が分からない、ということですね。それまで、作品として日常を写真に撮るといふことはあまりなかったのでしょうか？

「普段生活している中で見ている何気ない光景を撮るといふことはまずなかったし、荒木経惟が1971年に発表した「センチメンタルな旅」のように、自身の新婚旅行をそのまま赤裸裸に全部撮るなんてことはあり得ませんでした。しかも、それこそが写真だと荒木は言ったわけです。新婚旅行の写真は私の愛のそのものである、これこそが写真であり、それ以外は全部嘘っぱちだ、というわけです」

—お話をうかがっていると、この当時の写真の動向が、まるでロックやフォークソング、ニューミュージックといった音楽の流れと重なって見えてきます。

「まさに、そんなふうにとらえてもらっても良いと僕は思っています。荒木経惟の作品から感じる気分が、井上陽水の「傘がない」を聴く時のそれととてもよく似ているというのは、決して否定できない感覚だと思うし、この写真を撮っていた人たち、この写真を見ていた人たちはみんな、私たちと同じように音楽を聴き、映画をみ、小説を読み、演劇を観ていたわけですから」。

—時代とともに立ち上がってくるのが写真だということなんですね。

「変な言い方だけど、この展覧会を見終わって時代の気分だけでも分かってもらえれば良いんじゃないかと思っています。学生運動の写真を格好良いとみられてしまうのは、当時、その中にいた人たちからすればとんでもない、俺たちはこの写真を撮るために命をはっていたんだと言われるかもしれない。でも、時を経た今の時代の人々が、そういう写真を観て、熱い時代だなんて思う、これもまた正直な気持ちだと思う。そこから興味を持って、更にその先に進んで考えてもらえるきっかけになれば、この展覧会は大成功だと思っています」

(インタビュー・構成 富田秋子)



桑原甲子雄 靖国神社  
『東京昭和十一年』より 1935年

## 関連イベント

### 1.シンポジウム「日本写真の1968」

出演：パネリスト＝土屋誠一（美術批評家、沖縄県立芸術大学講師）、小原真史（IZU PHOTO MUSEUM 研究員）、富山由紀子（写真研究者 東京大学大学院博士課程）、金子隆一（当館専門調査員）、モデレーター＝倉石信乃（明治大学教授）

日時：2013年6月15日（土）14:00～17:00（会場 13:30）

会場：東京都写真美術館 1階ホール（定員 190名）

※入場無料（本展覧会の半券をお持ちの方に当日 10時より整理券を配布します。番号順入場、自由席）

### 2.担当学芸員によるフロアレクチャー

本展会期中の第2・4金曜日 16:00より、担当学芸員による作品解説を行います。

※本展覧会の半券（当日有効）をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

## 図録情報

本展の開催にあわせて、出品作品図版や展覧会担当者によるテキストなどを掲載した、展覧会カタログを発行します。2,600円（税込）

※当館 1階ミュージアムショップ ナディップ バイテン（03-3280-3279）にて発売します。

# 開催概要

- 展覧会名 日本写真の1968 1968—Japanese Photography  
会期 2013年5月11日(土)～2013年7月15日(月・祝)  
会場 東京都写真美術館 2階展示室  
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内  
ホームページ [www.syabi.com](http://www.syabi.com) 電話 03-3280-0099
- 開館時間 10:00～18:00(木・金は20:00まで) ※入館は閉館の30分前まで  
休館日 毎週月曜日(月曜日は祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)  
観覧料 一般 600(480)円/学生 500(400)円/中高生・65歳以上 400(320)円  
※( )は20名以上の団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および  
障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料
- 交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩約7分/東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分  
※当館には専用の駐車場がありません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

# お問い合わせ

※記事掲載用の図版データは、広報担当までお問い合わせください

- 東京都写真美術館 電話 : 03(3280)0034 FAX : 03(3280)0033
- 展覧会担当 金子隆一 [r.kaneko@syabi.com](mailto:r.kaneko@syabi.com) 田坂博子 [h.tasaka@syabi.com](mailto:h.tasaka@syabi.com)  
広報担当 久代 明子 [a.kushiro@syabi.com](mailto:a.kushiro@syabi.com) 平澤 綾乃 [a.hirasawa@syabi.com](mailto:a.hirasawa@syabi.com)  
前原 貴子 [t.maehara@syabi.com](mailto:t.maehara@syabi.com)